

## 【査読論文】

# 対人交流の減少下における 大学生の感謝経験に関する縦断調査<sup>1)</sup>

吉野 優香（武蔵野大学 ウェルビーイング学部 講師）

## 要約

感謝感情と負債感情の規定因には、「受益者が受け取った価値」、「利益供与者がかけたであろうコスト」、「利益供与者が受益者に持っていたであろう誠実性」の3つの主観的評価が統合された「利益の評価」が指摘されている。しかし、この指摘は個人内の変動に基づく検討が行われていない。本研究は、縦断データによって感謝感情と負債感情の規定因が「利益の評価」であることを検討することと、対人交流の減少下における大学生の感謝の経験を明らかにすることの2点を目的とした。1日4回1週間の期間で、感謝の経験とその概要に関する縦断調査を行った。その結果、個人内では負債感情と価値以外の変数の関係が正の関係を示し、「利益の評価」が感謝感情と負債感情の規定因であることに支持的な知見を得た。個人間では関係を明らかにできなかった。また、感謝の経験の報告は、両親への感謝や一緒に何かしたことへの感謝を多く確認した。

## 1. はじめに

日本における感謝の経験には、「ありがたみ」だけでなく、感謝の経験に付随して経験される「申し訳なさ」や「すまなさ」の生起が指摘される（藏永・樋口, 2011a, 2011b; 吉野・相川, 2018a; 2018b）。感謝を表明するには、「ありがとう」という言葉が用いられるが、時に我々は感謝を表明する場面で「すみません」という言葉を用いる（熊取谷, 1991）。つまり我々は同一の受益場面において、「ありがたみ」と「申し訳なさ」を正の相関で経験することがある（一言他, 2008; 吉野・相川, 2018a; 2018b）。この関係は、欧米のデータでは負の相関が示されるため（一言他, 2008）日米の感謝経験に関する興味深い差異である。

感情としての感謝は、状態的な感謝と特性的な感謝とに概念が区分される（Watkins et al., 2003）。状態的な感謝は感謝感情（emotional gratitude）と呼称

され、特性的な感謝は特性感謝（trait gratitude）と呼称される。感謝感情は、他者のおかげで望ましい状況の獲得もしくは悪い状況の回避がなされたと認知することで生じる肯定的な感情と定義され（吉野・相川，2018a），広義には、人以外も含めた神など他の存在に対して生じる感情であると指摘される（Watkins, 2007）。他方、特性感謝は、状態的な感謝の個人差を包括的に示す概念であり、「個人が、ポジティブな経験や結果をもたらした他者の慈善に対し感謝の感情を抱いたり、気がついたりする一般的な傾向」（Emmons & Shelton, 2002）と定義される。

感謝感情に付隨し経験される「すみません」といった感情は、負債感情と呼称され、他者のおかげで望ましい状況の獲得もしくは悪い状況の回避がなされたと認知することで生じる返済の義務に関わる感情と定義される（吉野・相川，2018a）。負債感情は、状態的な感情であり、認知としての心理的負債（Greenberg, 1980）に基づき受益等に関して「返報をしなければ申し訳ない」と感じる心苦しさである。他方で、負債感情を経験する個人差は、特性的な感情として特性負債感と呼称され、個人がポジティブな経験や結果をもたらした他者の慈善に対し負債の感情を抱いたり、気がついたりする一般的な傾向と定義とされる（吉野・相川，2018a）。

感謝感情と負債感情が同一の受益場面において経験される現象については、両感情に共通の規定因を示すことにより検討が進められている（吉野・相川，2018a）。感謝感情と負債感情の規定因は、主観的評価の認知的統合がなされた「利益の評価」（Wood et al., 2008）とされている。

利益の評価は、受益者による3点の主観的評価により構成される。1点目の主観的評価は、利益供与者の行動の「価値」、2点目は利益供与者が払ったであろう「コスト」、3点目は利益供与者が受益者に利益を与えた背景である「誠実性」である。これら3点の主観的評価が「利益の評価」として統合される。主観的評価の高さが利益の評価の高さとなり、利益の評価の高さに基づき感謝感情および負債感情の経験は強く規定される。加えて、利益の評価は特性感謝と特性負債感の高低から影響を受け、その程度が定まる。この知見により、ありがたみと「すまなさ」を同一の受益場面において経験する背景を規定因で説明することができ、感謝感情と負債感情の経験の個人差についても説明が可能

になる。

しかし、感謝感情と負債感情の規定因に関する知見（吉野・相川, 2018a）はシナリオを用いた横断調査によって得られた知見であり、縦断調査によっては検討されていないという課題がある。「利益の評価」は、Wood et al. (2008)において、3点の研究を経て感謝感情の規定因と示されたものである。1点目はシナリオを用いた横断研究、2点目は縦断研究、3点目は感謝感情に影響しうる性格特性との関連を検討した研究である。Wood et al. (2008)に基づけば、利益の評価が感謝感情の規定因である点は縦断調査を実施し個人内データにおいて検証済みであるが、負債感情の規定因である点は未検討である。利益の評価が両感情の規定因であると主張するためには、縦断調査による検討が求められる。

また、本研究は2021年の不要不急の外出を控えることが求められていた社会状況下に計画されたものである。大学教育においてもオンライン授業の実施が進められ、大学生は大学への登校機会が必要最低限に制限されていた。調査時において大学生は大学での様々な関係の他者と交流する機会が減っていたと言える。感謝感情や負債感情は対人交流のなかで生じる感情でもあるため、直接的な対人交流を控えるように求められていた特殊な社会状況におけるデータを記録することには社会心理学的価値がある。

以上より本研究の目的は次の2点とする。第一の目的は、縦断調査によって感謝感情と負債感情の規定因が「利益の評価」であることを検討することである。第二の目的は、対人交流が減少した状況下における大学生が経験する感謝感情の場面を明らかにすることである。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

都内の大学2校の2つのオンデマンド型授業（A校授業、受講者数212名とB校授業、受講者数119名）において調査依頼を行った。調査依頼に了承し、調査へ参加した調査対象者は20名であり、最終的な分析対象は19名（男性5名女性14名、平均年齢19.94歳±1.90）であった。

## (2) 調査依頼方法

調査参加者募集のための調査依頼は、各授業が利用していた Microsoft teams を用いて行われた。調査依頼期間は、授業期間終了後の翌週または翌々週に依頼用紙を掲示し、掲示から 1 週間の期間を設定した。

調査参加希望者は、調査用 LINE 公式アカウントへ友達登録を求められた。調査用 LINE 公式アカウントは、本研究の調査専用に研究責任者が作成したものであり、調査用 LINE 公式アカウントから、友達登録されたアカウントへ調査フォームの URL を配信した。

なお、調査時の本研究の研究名は、「日常生活の体験に関するアンケート」とした。感謝感情や負債感情といった道徳的な内容に関する調査であると分かることは、調査参加者に社会的望ましさ等の回答バイアスを生じさせる可能性がありそれらを避けるためであった。

調査参加に対する謝金の説明は、調査参加依頼時に謝金の支払い基準を含め行った。具体的な内容は、本文 2. (5) に記述した。

## (3) 調査の手続き

Exkuma (尾崎, 2021) を利用したオンラインでの縦断調査を行った。調査期間は月曜日から日曜日の 7 日間であり、毎日 4 回 (10:00, 14:00, 18:00, 22:00) の報告を求めた。各回答タイミングの時間には調査用 LINE 公式アカウントから調査参加者の LINE に回答フォームの URL が通知された。はじめの通知から 1 時間後に未回答の調査参加者へリマインドの通知がなされた。各回答タイミングの回答期限は、はじめの通知から 2 時間とした。回答所要時間は 1 回 5 分程度であった。これに加えて、調査の参加登録時には事前調査として、調査参加者に基本属性と特性尺度への回答を求めた。事前調査の所要時間は 15 分程度であった。

## (4) 事前調査の内容

調査参加の登録時に実施した事前調査では、調査参加者の性別、年齢、国籍および特性尺度への回答を求めた。国籍は、感謝感情や負債感情の経験の仕方に文化差が指摘されている (一言他, 2011; Watkins, 2014) ことから、データ

の特徴を把握するために必要な質問であった。回答は全て調査参加者の自由であることを調査冒頭の倫理的配慮等の記載にて説明しており、国籍を含めた調査への回答は調査参加者自身の判断で行われた。

事前調査において用いた尺度は、特性感謝を測定するために対人的感謝尺度（藤原他, 2014）7件法と、特性負債感を測定するため心理的負債尺度（相川・吉森, 1995）6件法であった。対人的感謝尺度は、児童を対象とした尺度であるため4件法であるが、大学生を対象に7件法で使用した吉野・相川（2018a）に基づき7件法で実施した。なお、本研究では調査対象者数が少ないため特性尺度は記述統計のみ算出し分析の対象としなかった。

### （5）調査期間中に実施した調査の内容

調査期間中に実施した毎日の調査では、調査への回答を求める通知と前回の通知の間の時間において経験した感謝経験に関する報告を求めた。例えば、14:00の回答を求める通知では、前回通知の10:00から14:00までの4時間の間の感謝経験に関する報告を記録することとなる。10:00の回答は、前夜22:00から深夜の時間は含めず、朝起きてからの感謝経験の報告を求めた。

感謝経験に関する報告の内容は、はじめに感謝の経験頻度について「前回のLINEの通知から、今回のLINEの通知が届くまでの間に、『感謝した出来事』はありましたか？朝10:00の調査の場合には、今日、起きてから10:00の通知が来るまでの間に経験した『感謝した出来事』についてお教えください。」と質問文を示し、「1回」、「複数回」、「なし」の3つの選択肢から報告を求めた。

感謝の経験頻度を「1回」または「複数回」と選択した場合は、「感謝経験があったと報告した」とし、「なし」を選択した場合は、「感謝経験がなかったと報告した」として、その後に表示する質問内容を変更した。「感謝経験がなかった」と報告した場合には、他者との交流の有無を尋ねた。他者との交流もなかった場合には、回答を終了した。

「感謝経験があった」と報告した場合、当該の感謝経験について尋ねた。教示文は、「あなたが経験した『感謝の出来事』について教えてください。1つの『感謝の出来事』を経験したと回答した方は、その出来事についてお答えください。複数の『感謝の出来事』を経験したと回答した方は、その中から詳細

を思い出せる出来事1つについてお答えください。」であった。この教示文は、「1回」を選択した回答者へは、唯一経験した感謝の出来事についての回答をもとめ、「複数回」を選択した回答者へは、複数の経験の中から詳細に思い出せる感謝場面についての回答を求める内容とした。当該の感謝経験への質問は、「利益供与者との関係性」、「感謝経験の概要」、「利益の評価」、「感謝感情と負債感情」であった。

「利益供与者との関係性」は、「この出来事において、あなたが感謝した相手はどのような関係の人ですか？以下の選択肢から選んでください。該当する選択肢がない場合には、その他にご記入ください。」と尋ね、次の選択肢から回答を求めた。選択肢は、「友人」、「現在所属している大学など学校の同級生（友人ではない）」、「母親または父親」、「兄または姉」、「弟または妹」、「職場（アルバイト含む）の上司」、「職場（アルバイト含む）の同僚」、「他人、見知らぬ人」、「その他」であった。「その他」を選択した場合には、自由記述で利益供与者との関係性の報告を求めた。これらの項目は、被援助研究や感謝研究などを参考に選出した（松浦，1992；吉野・相川，2015）。

「感謝経験の概要」の選択肢は、「その感謝の出来事の内容は、以下の分類のうちどの出来事にあてはまりますか？選択肢から選んでください。該当するものが無い場合は、その他にご記入ください。」と尋ね、次の選択肢から回答を求めた。選択肢は、「手助け（宿題を教わる・助けられる・道案内など）」「相談（悩み相談・愚痴を話したなど）」「プレゼント（誕生日・お土産、お菓子をもらったなど）」「一緒に何かをした（遊んだ・お茶をしたなど）」「その他」であった。「その他」を選択した場合には、自由記述で感謝経験の概要について報告を求めた。これらの項目は、被援助研究やサポート研究を参考に選出した（松浦，1992；浦，1992）。

「利益の評価」の質問項目は、Wood et al. (2008) および吉野・相川 (2018a) を参考に作成した。「価値」の質問項目は、「この出来事は、あなたにとってどれくらい価値のあるものでしたか？」の1項目とし、「0：一切ない」から「10：かなり多い」の11件法によって回答を求めた。「コスト」の質問項目は、「その人は、あなたとのやり取りにどれくらいのコストをかけたと思いますか？（時間や、労力、金銭面のコストなどの点で）」の1項目とし、「0：一切ない」か

ら「10:かなり多い」の11件法によって回答を求めた。「誠実性」の質問項目は、「その人は、あなたとのやり取りにおいてあなたへの誠実な思いをどのくらい持っていたと思いますか?」の1項目とし、「0:まったく持っていない」から「10:完全に持っていた」の11件法によって回答を求めた。

経験によって生じた感謝感情と負債感情は、8項目11件法（吉野・相川, 2018a）で回答を求めた。感謝感情の4項目は、「好ましい」、「ありがたい」、「感謝」、「寛大な」であり、負債感情の4項目は「負い目」、「申し訳ない」、「悪い」、「すまない」であった。11件法の選択肢は、「0:まったく感じない」から「10:とても強く感じる」であった。

#### （6）デブリーフィングおよび調査参加に対する報酬

調査最終日のアンケートにおいてデブリーフィングおよび報酬の受け取りに関する説明がなされた。

協力への報酬は、1週間の調査期間すべてに回答を行った調査参加者にはクオカード pay 800円分を支払い、回答不参加分がある調査参加者には、調査の7割以上に回答を行った場合、クオカード pay 300円分を支払った。

本研究に関わる全ての研究倫理的事項は、調査を行った大学2校における研究倫理審査の承認を得ている（研究倫理審査番号：立正大学研究倫理審査委員会 R2021002号、東京成徳大学研究倫理審査委員会 21-3）。

### 3. 結果

#### （1）データの削除基準および変数の作成

事前調査および縦断調査で得たデータは、縦断調査の回答数や欠損値などを考慮しデータをスクリーニングして用いることが妥当であるが、本調査によって得られたデータ数が20と少なかったため、基本的には削除せずに分析することとした。なお、本研究テーマにおける文化差の指摘を考慮し、国籍を日本以外と回答したデータは分析対象外とした。その結果、国籍を日本以外と回答したデータを1点削除し、分析対象はN=19となった。分析対象となったデータの縦断データにおける回答数の内訳は、28回が8名、27回が5名、26回が2名、24回が1名、23回が1名、7回が1名、1回が1名であった。

分析対象となったデータから、変数を作成した。特性感謝の変数は尺度を構成する8項目の平均値を得点とした。特性負債感の変数は、吉野・相川（2018a）に倣い、尺度を構成する18項目から恩と感謝に関する質問を2項目除いた16項目の平均値を得点とした。縦断データの変数は、次の通りに作成した。「利益の評価」を構成する価値、コスト、誠実性の3変数は、各1項目の質問の回答を得点とした。感謝感情と負債感情の2変数は、各4項目の平均値をそれぞれの得点とした。

作成した変数の記述統計量は、回答タイミングごとにTable 1へ示した。

本研究で使用した変数の記述統計										事前調査時の測定変数										
利 益 の 評 価 値	月曜日					火曜日					水曜日					木曜日				
	10:00	14:00	18:00	22:00		10:00	14:00	18:00	22:00		10:00	14:00	18:00	22:00		10:00	14:00	18:00	22:00	
利 益 の 評 価 値 の コ ス ト	平均値	6.22	6.91	7.17	7.85	6.00	6.67	7.80	7.50	5.25	6.75	6.90	6.57	7.00	7.40	6.17	7.00			
	SD	1.47	2.15	3.24	2.18	2.45	2.49	2.18	1.71	2.17	1.39	2.55	2.19	1.87	1.85	2.67	2.05			
評 価 値 の 誠 実 性	平均値	4.33	3.55	4.83	6.23	3.57	4.50	5.20	6.08	2.75	5.00	4.00	5.00	5.50	5.40	4.33	4.20			
	SD	2.00	2.06	2.91	2.69	2.56	2.90	2.64	2.81	0.83	2.74	1.95	2.62	2.87	3.14	2.43	2.18			
評 価 値 の 誠 実 性 の 平 均 値	平均値	7.78	6.73	8.00	6.31	5.71	6.00	7.30	7.67	6.75	6.63	7.30	5.86	6.00	5.20	6.67	7.60			
	SD	1.47	2.63	1.53	3.75	1.48	2.89	1.42	2.72	1.92	2.23	1.73	2.29	0.71	2.71	2.13	1.20			
感謝感情 の 平 均 値	平均値	5.89	5.77	6.17	5.54	4.29	4.52	5.78	5.60	5.06	5.00	4.08	5.07	5.38	4.30	3.96	5.15			
	SD	1.04	1.10	1.12	1.57	1.74	2.07	1.32	1.17	2.88	1.70	1.96	1.68	1.28	1.07	1.87	1.34			
負債感情 の 平 均 値	平均値	3.17	0.91	1.67	1.31	2.46	0.35	1.43	1.58	2.44	0.66	0.53	0.89	1.25	0.55	0.79	0.70			
	SD	3.07	1.10	2.32	1.97	2.81	0.83	2.25	2.06	2.91	1.05	0.83	1.30	1.30	0.68	0.95	0.86			
金曜日										土曜日										
利 益 の 評 価 値 の コ ス ト	平均値	5.25	6.11	6.00	6.33	8.20	6.50	6.43	7.00	7.50	6.10	7.29	6.90	特 性 感 謝	平均 値	6.20				
	SD	1.30	1.79	1.22	2.25	1.17	2.29	3.20	2.48	1.50	2.84	2.25	1.45	SD	0.57					
評 価 値 の 誠 実 性	平均値	3.00	4.22	5.00	4.25	6.20	4.38	5.14	3.83	7.50	4.70	6.86	3.30	特 性 負 債 感	平均 値	4.21				
	SD	2.12	3.52	2.35	2.52	2.48	2.29	2.80	2.76	1.50	2.87	2.03	1.73	SD	0.50					
評 価 値 の 誠 実 性 の 平 均 値	平均値	6.50	6.22	5.25	6.50	7.40	8.00	6.29	6.42	7.50	5.60	6.57	6.30							
	SD	0.50	2.94	1.92	1.61	1.50	1.32	3.24	2.60	1.50	3.17	1.84	1.79							
感謝感情 の 平 均 値	平均値	4.69	4.39	4.44	4.46	5.80	5.13	4.25	4.67	5.63	4.33	5.50	4.78							
	SD	0.37	1.62	0.82	1.53	1.57	1.47	2.43	2.17	1.63	2.15	2.14	1.94							
負債感情 の 平 均 値	平均値	0.63	0.89	0.63	0.38	2.60	1.31	1.32	0.92	1.63	0.90	2.11	0.68							
	SD	0.94	1.24	1.08	0.89	2.40	1.77	1.99	1.84	1.63	1.70	2.35	0.96							

## (2) 縦断データによる感謝感情と負債感情の規定因「利益の評価」の検討

第一の目的を検討するためには、特性感謝・特性負債感から「利益の評価」を構成する価値、コスト、誠実性の3変数を介し、感謝感情と負債感情へ及ぶ影響を媒介モデルで検証することが求められる。しかし、 $N = 19$  はマルチレベルのモデル解析に耐えうるデータ数ではないと考えられたため、モデルの検証は行わないとした。以降では、参考の分析結果として縦断データにおける変数の級内相関係数およびマルチレベル相関の結果を示す。各相関係数の値は、HAD（清水, 2016）により算出した。

縦断調査によって得たデータを縦断データとして分析すべきかどうかを判断するために各変数の級内相関を求めた。級内相関はいずれも中程度を示し、すべての変数は縦断データとして扱うことができると判断した（Table 2）。

Table 2  
変数の級内相関

価値	コスト	誠実性	感謝感情	負債感情
.361 **	.458 **	.438 **	.410 **	.350 **

\*\*  $p < .01$

個人内と個人間のそれぞれにおいて「利益の評価」を構成する「価値」「コスト」「誠実性」が感謝感情と負債感情と関連することを検討するために、各変数間のマルチレベル相関を求めた。マルチレベル相関により、調査参加者個人内の1週間の回答に関する相関である within レベルの相関係数と、調査参加者個人間の1週間の回答に関する相関である between レベルの相関係数を求めた。

within レベルのマルチレベル相関の結果は次の通りであった（Table 3）。まず、「利益の評価」を構成する3変数は、コストと誠実性のみ 10% 水準で有意傾向であったが、価値とコストは 1 % 水準で、価値と誠実性は、0.1% 水準で正の相関を示した（価値とコスト： $r = .18, p = .009$ 、価値と誠実性： $r = .37, p < .001$ 、コストと誠実性： $r = .12, p = .075$ ）。

感謝感情と「利益の評価」の3変数の関連は、すべて 0.1% 水準で有意な正の相関を示した（価値、コスト、誠実性： $rs = .38, .27, .32, ps < .001$ ）。

負債感情と「利益の評価」の3変数の関連は、価値とは有意な相関を示さなかつたが、コストとは 1 % 水準で、誠実性とは 5 % 水準で有意な正の相関を示

した（価値： $r = .11, p = .116$ , コスト： $r = .22, p = .001$ , 誠実性： $r = .16, p = .022$ ）。感謝感情と負債感情は、0.1%水準で有意な正の相関を示した（ $r = .45, p < .01$ ）。

Table 3  
withinレベルのマルチレベル相関の値

	価値	コスト	誠実性	感謝感情	負債感情
価値					
コスト	.183 **				
誠実性	.372 ***	.124 +			
感謝感情	.377 ***	.266 ***	.315 ***		
負債感情	.109	.224 **	.160 *	.450 ***	

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

between レベルのマルチレベル相関の結果は次の通りであった（Table 4）。まず、「利益の評価」を構成する3変数は、価値とコストは5%水準で有意な正の相関を示したが（ $r = .67, p = .027$ ），価値と誠実性，コストと誠実性は、有意な相関を示さなかった（価値と誠実性： $r = .12, p = .680$ ，コストと誠実性： $r = -.16, p = .531$ ）。

感謝感情と「利益の評価」の3変数の関連は、価値と5%水準で有意な正の相関を示し（ $r = .11, p = .023$ ），誠実性と10%水準の有意傾向であるが正の相関を示した（ $r = .54, p = .061$ ）。コストとの関係は有意な相関を示さなかった（ $r = .46, p = .101$ ）。

負債感情と「利益の評価」の3変数の関連は、いずれも有意な相関は示さなかった（価値，コスト，誠実性： $r_s = .12, .30, .34, p_s = .624, .264, .218$ ）。

感謝感情と負債感情は、10%水準の有意傾向であるが正の相関を示した（ $r=.50, p=.088$ ）。

Table 4  
betweenレベルのマルチレベル相関

	価値	コスト	誠実性	感謝感情	負債感情
価値					
コスト	.672 *				
誠実性	.108	-.161			
感謝感情	.718 *	.458	.541 +		
負債感情	.131	.302	.337	.499 +	

$\rho < .05$ , +  $p < .10$

### (3) 対人交流が減少した状況下における大学生の感謝感情の経験

第二の目的である対人交流の減少下における大学生の感謝感情を経験する場面について検討するために、感謝経験に関する質問で報告された「利益供与者」と「感謝経験の概要」について、回答タイミングごとに報告数を折れ線グラフにて示した (Figure 1 - a, b)。グラフの数値は Table 5 に示した。

利益供与者の報告は、全期間で「母親か父親」が 117 件と最も多く報告され、次に「友人」が 33 件と多く報告された。「同級生」が 0 件で最も少なかった。他の選択肢の報告数は 2-30 件の幅であった。

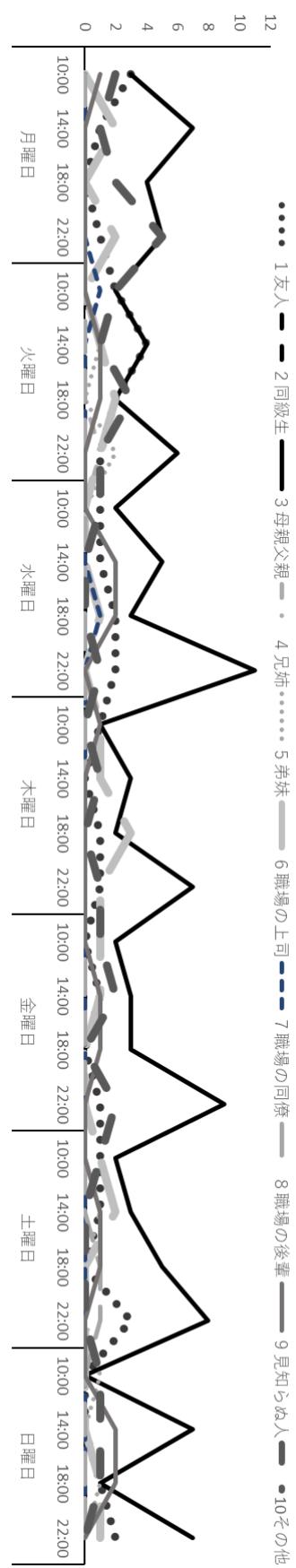
利益供与者において「その他」の選択は 30 件なされた。報告された内容は、「美容師」、「大学事務」などの「仕事中の人」に関する報告が 11 件あり、「祖父」、「祖母」の「祖父母」に関する報告が 6 件あり、「神様」、「時間」の「神や自然など超越したもの」に関する報告が 2 件あり、「彼氏」といった「恋人」に関する報告が 3 件あった。他は、感謝経験の概要に記載される内容が誤って書かれているものが 4 件あった。

感謝経験の概要は、全期間で「一緒に何かをした」が 67 件と最も多く報告され、次に「手助け」が 64 件と多く報告された。「相談」が 28 件で最も少なかった。他の選択肢の報告数は 31-41 件の幅であった。

感謝経験の概要において「その他」の選択は 31 件なされた。報告された内容は、「ごはんを作ってくれた、掃除をしてくれた」などの「負担をおってくれた」内容が 19 件あり、「充実した時を過ごした」、「健康な体で不自由なく過ごせている」などの「平穏」に関する内容が 2 件、「背中を押してくれる言葉をくれた」という「寄り添い」に関する内容がみられた。他は、利益供与者の種類を誤って書いているものが 2 件あった。

報告時間帯を絞って検討した場合は、利益供与者については水曜日 18:00-22:00 台の「母親か父親」である感謝経験の報告が 11 件と最も多かった。感謝経験の概要については、水曜日 14:00-18:00 台の「一緒に何かする」が 6 件と最も多かった。

**Figure 1-a**  
利益供与者の報告数に関する回答タイミングごとの推移



**Figure 1-b**  
感謝経験の概要の報告数に関する回答タイミングごとの推移

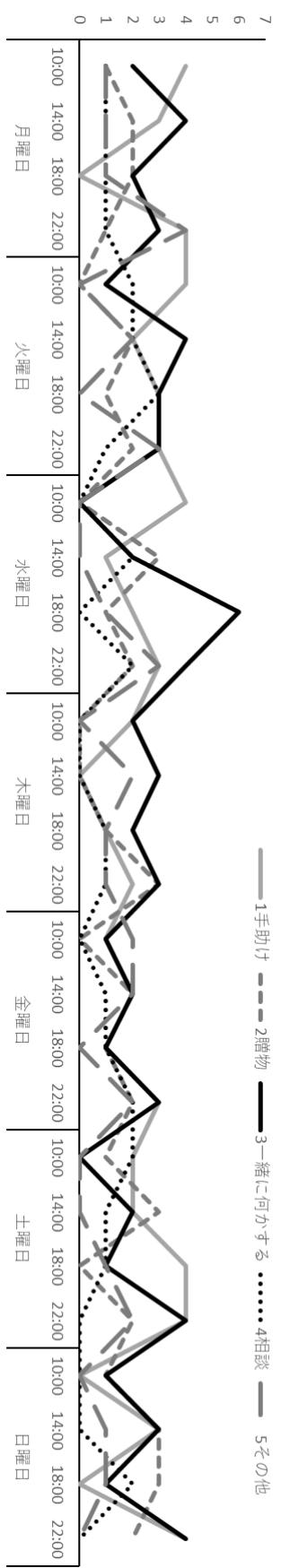


Table 5

利益供与者および感謝経験の概要に関する回答タイムミングとの報告数

	月曜日							火曜日							水曜日							木曜日							金曜日							期間合計
	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00	10:00	14:00	18:00	22:00				
友人	3	1	0	1	2	4	2	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	3	0	0	0	1	2	33				
同級生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
母親父親	3	7	4	5	2	4	2	6	2	5	3	11	1	3	2	7	2	3	3	9	2	3	5	8	0	7	1	7	117	0						
兄姉	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2					
利 益 供 与 者	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7					
利 益 供 与 者	0	2	0	2	0	1	2	1	0	0	1	0	1	1	3	1	1	1	0	0	1	2	0	0	0	0	1	1	22	0						
同僚	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2					
職場の 後輩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2					
見知らぬ人	1	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	2	2	0	0	0	0	16					
その他	2	1	2	5	2	1	3	1	1	0	0	1	0	1	1	2	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	0	0	30					
感謝 贈物	1	2	2	1	0	2	1	2	0	3	1	2	0	0	1	3	0	2	1	2	1	3	0	2	1	3	3	2	41	41						
経 験 の 何かする 相談 要 その他	2	4	2	3	1	4	3	3	0	2	6	4	2	3	2	3	1	2	1	3	0	2	1	4	1	3	1	4	67	67						
	1	1	1	1	2	2	3	1	0	2	0	2	0	0	1	1	0	1	1	2	1	1	0	0	0	2	0	28	28							
	1	1	4	0	2	0	3	0	0	1	3	0	2	1	1	2	2	0	2	0	1	2	0	1	1	0	31	31								

#### 4. 考察

本研究の目的は、縦断データによって感謝感情と負債感情の規定因が「利益の評価」であることを検討することと、対人交流の減少下において大学生が経験する感謝感情の場面を明らかにすることの2点であった。目的を検討するために、事前調査と1日4回の調査を1週間にわたり実施する縦断調査を行った。

##### (1) 感謝感情と負債感情の規定因「利益の評価」に関する考察

第一の目的である縦断データを用いた感謝感情と負債感情の規定因が「利益の評価」であることの検討では、「利益の評価」を構成する3変数である価値、コスト、誠実性と、感謝感情、負債感情についてマルチレベル相関係数の算出を行った。

分析の結果、within レベルでは、「利益の評価」を構成する3変数は、コストと誠実性の関係のみ有意傾向であったが、すべての変数間の関係において正の相関関係があると示された。感謝感情と「利益の評価」を構成する3変数との関係も、すべて正の相関関係があると示された。負債感情と「利益の評価」を構成する3変数との関係は、価値との関係性には有意な相関関係は示されず、コストとの関係性および誠実性との関係性はそれぞれ正の相関関係があると示された。

他方、between レベルでは、「利益の評価」を構成する3変数は、価値とコストの関係のみ有意な正の相関が示されたが、他の変数間の関係には有意な関係性は示されなかった。感謝感情と「利益の評価」を構成する3変数との関係は、価値との関係性および誠実性との関係性において、それぞれ正の相関関係があると示された。負債感情と「利益の評価」を構成する3変数との関係は、いずれの関係においても有意な相関関係があるとは言えなかった。

先行研究に基づくと、各変数の関連は次のように予想できた。まず、「利益の評価」は価値、コスト、誠実性の3変数により構成される因子であることが示されているため (Wood et al., 2008; 吉野・相川, 2014), 価値、コスト、誠実性はすべて正の相関関係がある。次に、「利益の評価」は感謝感情と負債感情と正の関連があると示されているため (吉野・相川, 2018a), 「利益の評価」を構成する3変数と感謝感情、負債感情は正の相関関係がある。本研究の結果

は、within レベルにおける関係はおおむね先行研究と一致したと言えたが、between レベルにおける関係は先行研究と一致したとは言えなかった。

within レベルの結果は、縦断データによる個人内の変動をもとに「利益の評価」を構成する 3 変数の正の関連と、「利益の評価」と感謝感情、負債感情の正の関連を示すことができたため、参考程度ではあるが、感謝感情と負債感情の規定因として「利益の評価」が存在することを支持する知見の 1 つとなりうる。加えて、負債感情と価値の関連が示されなかつたことは、日本人は受益者の立場のときに受け取った価値よりもコストを重視して心理的負債感を経験しやすいという先行研究と一致する（相川, 1988）。横断調査での検討において、特性負債感と負債感情は「利益の評価」を完全媒介しなかつたが（吉野・相川, 2018a），その理由を検討する際に有益な知見となりうる。

負債感情を検討する際に、教示文について考慮すべき新たな視座も得た。本研究で実施した調査では教示文において「感謝した出来事」を尋ねているため、申し訳なさやすまなさといった負債感情の側面よりも、感謝感情を重視した報告がなされた可能性がある。教示文に「申し訳なかった出来事」と負債感情の側面を強調した文面を用いた調査を行う必要性を見出すことができた。

between レベルの結果は、各変数の組み合わせは正の関係が示されると予想できたが、統計的仮説検定においては示された相関係数に有意性は示されなかつた。算出された相関係数を参照すると値は大きいもののが多かつた。そのため、 $N=19$  であることから誤差が大きく検定上は非有意と示された可能性がある。

## （2）対人交流の減少下における大学生の感謝経験に関する考察

第二の目的である対人交流が減少した状況下における大学生が経験する感謝感情の場面を検討するために、感謝の出来事に関する概要と利益供与者の種類について回答タイミングごとに報告数を記述した。

感謝経験の概要では、「一緒に何かをした」と「手助け」の報告数が多く見られた。利益供与者では、「母親か父親」の報告数が最も多く、次に「友人」が多かつた。その一方で「同級生」の報告はなかつた。これらのことから外出の自粛が求められ直接的な対人交流が制限されたことを背景とし、家族や友人

といった身近な関係は、交流の優先度が高く感謝経験が多く生じたが、同級生のような距離のある関係は、交流が控えられ感謝経験があまり生じなかつたか、報告に上がらなかつたと考えられる。

また、利益供与者および感謝経験の概要における「その他」の記述内容から、利益供与者と感謝経験の概要を尋ねる際の項目を見直す必要性も見出すことができた。利益供与者の「その他」に記載された「仕事中の人に」に関する報告や「祖父母」に関する報告、「恋人」に関する報告は、援助要請の研究において専門家や家族への相談と区別し検討もされており（永井, 2010），同様の調査を行う際に反映させることが望ましい。感謝経験の概要の「その他」に記載された「負担をおってくれた」報告や、「平穏」に関する報告、「寄り添い」に関する報告も、感謝研究の流れ（蔵永・樋口, 2011a; 2011b）において重要な分類と一致するものが多い。特に「平穏」については、利益供与者の「その他」に記載された「神や自然など超越したもの」に関する報告とも関連するため、同様の調査を行う際に項目を追加するなどの対策が必要である。

### （3）本研究の限界

本研究には3点の限界が挙げられる。

1点目は、分析対象となったデータ数の不足である。本研究において分析対象のデータ数は $N = 19$ であった。データ数が不足していたことにより誤差が大きくなり、また複雑な分析を実施できなくなつた。これは、調査依頼時期の設定が課題であったと考えられる。調査協力の依頼はオンライン授業の受講者に対して行われており、調査依頼と募集の時期は、授業終了後の1, 2週間にて行われた。そのため、授業期間外の受講者はオンライン授業のアプリの確認をしなくなり<sup>2)</sup>縦断調査の協力依頼に気がつかなかつた可能性がある。

この可能性を裏付けるように、調査に協力した20人（文化差の観点から分析上は除外したデータを含む）のうち18人が7割以上の回答率で調査に協力をしていた。縦断調査において回答数の不足により分析対象外となることは頻繁に起こりうることだが、今回の調査回答者は極めて真面目な層であったことが推測できる。授業期間終了直後においてもオンライン授業ツールを真面目に確認していた受講者層だけが調査依頼に気がつくことができたのであろう。

本限界の改善は、外出自粛が促されていない時期であればオンライン上だけの調査依頼の告知に加え対面で説明する機会を設け、調査依頼を行うことなどが挙げられる。また、調査回答者のなかの真面目な層だけが分析対象となることも、調査結果にバイアスを発生させるため、調査対象者を大学生に限定せずオンラインで対象を幅広く設定した縦断調査の実施も必要である。

本研究の限界の2点目は、分析に用いた統計的手法の不十分さである。本来であれば本研究の第一の目的である感謝感情と負債感情の規定因として「利益の評価」を検討することは、特性感謝、特性負債感から「利益の評価」を介し感謝感情と負債感情へ至る媒介効果を仮説モデルに設定して検証する必要があった。しかし、1点目の限界として挙げたデータ数の不足により分析ができず、本来であれば削除すべき回答数の少ないデータも分析対象としていた。簡易的な代替の分析としてマルチレベル相関係数を算出したが、マルチレベル相関係数では2変数の関係しか明らかにできず、他の変数からの影響を統制することもできていない。分析対象となるデータ数を増やした調査を行い、研究目的により適した分析方法によって検討する必要がある。

本研究の限界の3点目は、対人交流が減少する前の感謝経験を調査できていないことである。本研究は第二の目的において、対人交流が減少せざるを得なかった社会状況下における大学生の感謝感情の経験について記録することを挙げた。収集したデータは目的に沿ったデータであると言えるが、解釈をするうえで本研究のデータだけでは、対人交流が減少したことによる特徴的な感謝感情の経験を解釈できない。比較のために対人交流が回復した社会状況において大学生の感謝感情の経験の記録が求められる。

本研究に利益相反はない。

### 謝辞

本論文は立正大学令和3年度研究推進・地域連携センター支援費（第3種）の助成を受けたものです。

本論文のデータ収集において長崎大学、湯立先生（当時、東京成徳大学）へ倫理申請やデータの収集においてご協力いただきました。感謝申し上げます。

## 注釈

- 1 本論文は、日本心理学会第86回大会にて発表した「オンライン授業受講大学生の感謝経験に関する縦断調査」のデータを分析しなおして発表に至ったものである。
- 2 オンライン授業のツールは、調査を行った大学において学科からの連絡も配信するものであり学生へはこまめな確認をするように指示がされていた。

## 参考文献

- 相川 充 (1988). 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58, 366-372.
- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, 11, 63-72.
- Emmons, R. A., & Shelton, C. M. (2002). Gratitude and the Science of Positive Psychology. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez (Eds.), *Handbook of Positive Psychology* (pp. 459-471). New York: Oxford University Press.  
10.1093/oso/9780195135336.001.0001
- 藤原 健志・村上 達也・西村 多久磨・濱口 佳和・櫻井 茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, 62, 187-196. 10.5926/jjep.62.187
- Greenberg, M.S. (1980). A theory of indebtedness. In K. Gergen, M.S. Greenberg & R. Willis (Eds.), *Social exchange: Advances in theory and research*. New York e Plenum. 10.1007/978-1-4613-3087-5
- 一言 英文・新谷 優・松見 淳子 (2008). 自己の利益と他者のコスト 感情心理学研究, 16, 3-24. 10.4092/jsre.16.3
- 熊取谷 哲夫 (1991). 日本語における「感謝」の談話構造と表現配列——「すみません」と「ありがとう」の場合—— 広島大学日本語教育学科紀要, 1, 61-67.
- 蔵永 瞳・樋口 匡貴 (2011a). 感謝の構造——生起状況と感情体験の多様性を考慮して—— 感情心理学研究, 18, 111-119. 10.4092/jsre.18.111

- 藏永 瞳・樋口 匠貴 (2011b). 感謝生起状況における状況評価が感謝の感情体験に及ぼす影響 感情心理学研究, 19, 19-27. 10.4092/jsre.19.19
- 永井 智 (2010). 大学生における援助要請意図——主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因—— 教育心理学研究, 58, 46-56. 10.5926/jjep.58.46
- 尾崎 由佳 (2021). exkumaによる経験サンプリング法 – LINEアプリを通じたシグナリングとその効果検証 日本心理学会第85回大会.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Watkins, P. C. (2007). Gratitude. In R. Baumeister & K. Vohs (Eds.), *Encyclopedia of social psychology* (pp.383-384). Thousand Oaks, CA: Sage. 10.4135/9781412956253
- Watkins, P. C. (2014). *Gratitude and the good life*. New York, NY: Springer. 10.1007/978-94-007-7253-3
- Watkins, P. C., Van Gelder, M., & Frias, A. (2009). Furthering the science of gratitude. In R. Snyder & S. Lopez (Eds.), *The Oxford handbook of positive psychology. 2nd ed.* New York: Oxford University Press. pp.437-445. 10.1093/oxfordhb/9780195187243.001.0001
- Wood, A. M., Maltby, J., Stewart, N., Linley, P. A., & Joseph, S. (2008). A social-cognitive model of trait and state levels of gratitude. *Emotion*, 8, 281. 10.1037/1528-3542.8.2.281
- 吉野 優香・相川 充 (2014). 被援助場面における特性感謝と状態感謝に関する社会的認知モデルの検討 筑波心理学研究, 47, 47-53.
- 吉野 優香・相川 充 (2015). 感謝感情喚起手法としての「感謝の手紙」の内容分析 日本心理学会第79回大会, 238.
- 吉野 優香・相川 充 (2018a). 被援助場面で経験される感謝感情と負債感情の生起過程モデルの検討 心理学研究, 88, 535-545. 10.4992/jjpsy.88.16044
- 吉野 優香・相川 充 (2018b). 感謝感情と負債感情の共起が第三者への向社会的行動に及ぼす影響 筑波心理学研究, 55, 39-48.